

レースっていいよね
第35回 「どう死を迎えるか」の巻

身内の不幸があったからという訳でもないが、時々「死」の意味を考える事がある。「死」とは「生」の対義語であり、そして等価値かつ平等に万物に与えられた責務。

「色即是空」の言葉通り、森羅万象万物に永遠は存在しない。
人は生まれた以上「生き」なくてはならず、そして必ず「死」ななければならない。「生」が比較的明るいイメージであるのに対し、「死」には暗く、恐ろしいイメージが付いて廻る。だから普段「死」を口にするのはタブーとされる。しかし、「死」を真剣に考えることは、「生」を悟るに等しい。

「自分の死」をどう迎えるのか。大変難解である。
まだ人間が出来ていないせいもあるだろうが、出来れば死にたくない。いや、生きたいのだ。

単純に「始まり」と「終わり」というように割り切れれば良いのだが、自分を含め友人、ペットといったつながりのある「生命」の終焉を考える時、そう簡単に「終わり？あ、そう」とはいかないものだ。

不思議な事に、「生物の命」と同じく、本来「命の無い」筈である物体の終焉に「割り切れない思い」を抱く事がある。例えばそれは愛車であったり、その他、愛着のある物がそうだ。

無機質であっても時として愛情を感じる人間にとって、自分の死はともかく、それが親しい者の「死」であった場合
その想いは想像すら出来ない。

そう考えると、もし自分が「永遠の生」を得たとして、しかしそれは老い、朽ちていくモノ達を見送り続けなくてはならないという事であり、とても耐えられるものではない。

やはり、死ななくてはならないようだ。そのタイミングがいつ来るのかは分らない。まさに運命なのだろう。明日かもしれないし、100年先かもしれない。

私は基本的に無宗教だが、人によっては「死後の世界」や「輪廻転生」を信じられる場合もある。個人的には「死」は「終わり」であると認知している。だから、極楽も地獄も特に深く考えない。また生まれ変わる、といったロマンチックな思考も無い。

死後の存在を信じない私には余計に、死ぬまでのプロセスが大切になってくる。

何せ、死んだ後に何か出来る可能性が無いのだから、せめて生きている内に後悔の無いよう生きて「成仏」して、その上で死ななくてはならない。

また、死に際も大切だ。痛いのは嫌だ。怖いのも嫌だ。醜態をさらすのはもっと嫌だ。

花のように「パツ」っと美しく散るか、良い気持ちで「スツ」と消えて行くか。出来ればどちらかが良い。「笑い死ぬ」のも一つの手かもしれない。ひたすら笑って、腹を抱えながら「フウ・・・」と息をついた所で「サツ」と昇天。

ところで、死後の世界を信じない以上、宗教に準ずる極楽へ行くための儀式ばった葬式も特にして欲しいとは思わない。もし葬式に私の意思が尊重されるのであれば、暗いのではなく、音楽などを伴った明るい葬式にして欲しい。

霊柩車は趣味悪いから嫌。ランボルギーニ・ディアブロとか、走るだけで騒々しくてカッコイイクルマが良

いな。

そんなクルマに棺桶が入る筈も無いから、助手席に乗せてくれればいい。運転手は気が気でないだろうな…。

亡骸は焼いてもいいけど、骨は壺に入れるんじゃなくて、イタリアやリンダのトコの牧場みたいな広大で美しい土地で土に返りたいなあ。とも思う。

さてよ、死後を信じないなら、死んでからどうされようが関係無いのか。まだまだ「生死」を悟るには時間が掛かりそうだ。

